

# 大地

第 60 号  
2020. 2. 20. 発行  
浄 國 寺  
上越市寺町3丁目14-10  
☎025-523-5724

## 【俳句】

山崎 睦

雪降るも降らぬも冬を迎へねば

健やかな日々をいただき師走なる

竿の物みな飜り彼岸晴

納骨の明日なる墓の草を引く

冬装備して夜桜の客となる

何かして居らねば眠き春炬燵

句集『朝の光』より

平成七、八年

## 脳にブレーキを 心にアクセルを

山崎隆史

ある言葉を、音の似た別の言葉に置き換える言葉遊びの一種を「駄洒落」といいます。「駄」の文字が示す通り、高らかな洒落とは見なされず、連発すると「オヤジギャグ」と言われて煙たがれる場合があるので要注意です。

とあるテレビ番組で、「男の人が歳をとると、オヤジギャグをいうのはなぜか」という問題の答えが「歳を取ると脳のブレーキが利かなくなるから」という、とんでもないものでした。その後の解説によれば、歳をとるごとに言葉同士を関連付ける能力が発達して駄洒落を思いつくようになるが、逆に「脳のブレーキ」は利かなくなると駄洒落を言いたい衝動を抑えられなくなる、という事でした。その放送を見て以来、我が家では時々、駄洒落を言つては「脳のブレーキが利かなかつた」と言うのが定番になりました。

言わないで良い事を言わないようにするのが「脳のブレーキ」なら、言うべきことを言うようにするのは「脳のアクセル」でしょう。いやいや「脳のアクセル」なんていうと何だか少し危ない雰囲気があるので、ここ

は「心のアクセル」としておきましょう。

「こんにちは」「さようなら」といったあいさつの言葉、「ありがとう」の感謝の言葉、「ごめんなさい」という謝罪の言葉などは、言うべき言葉、「心のアクセル」を利かせるべき言葉でしょう。

私は子供の頃、素直に「ありがとう」「ごめんなさい」を言えませんでした。何か良く分からない、子供なりの照れがあったのです。しかし大人になってこれではいかんと思い、「心のアクセル」を利かせて「ありがとう」「ごめんなさい」を言うようにして、徐々に口を慣らしていきました。今ではちやんと「ありがとう」「ごめんなさい」を言えます。改まった場面で心を籠めて言おうとすると、いまだに照れがあります。

さて、「南無阿弥陀仏」という言葉がありまして、これは「口にただ称える」だけではないかと蓮如上人も仰せですが、なかなか難しいものです。皆さんは心を籠めて「南無阿弥陀仏」と称えておられるのでしょうか。私などはまだ「南無阿弥陀仏」に口を慣らしているところ、かも知れません。

最後に「心のアクセル」を利かせ、ごあいさつします。明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。和尚が二人で、おしよがつー（フルスロットルでございます）。

## ウソみたいだな、

山崎 直子

年明けの陽気の穏やかさが嬉しくもありまた不安でもあり、昨年以上の雪の少なさに驚きながら二〇二〇年を迎えました。今までの分がこれから降るよ、と言われた方が信じられるような気もしています。

お年始でお会いする皆さんともやはり雪の話題が欠かせず、スキー場の営業の大きさや山に降る雪が夏の農業用水となることなど、降雪がこの地域にとってどれほど影響するものなのかを改めて感じました。美味しいお米作りには雪解けのきれいな水が欠かせないと伺い、自然の循環に感心しつつ、去年続いた猛暑や豪雨がやはり頭をよぎります。

五月の改元騒ぎに首をひねる間もなく、夏の暑さに秋の台風と、「超」がつくことが珍しくなくなった気象状況に人間の存在の小ささと瀬戸際まで来ている自然の状況を突き付けられたような不安が漠然と感じられます。平成から令和に移って初めての夏の四〇度越えはここ高田の観測所だったとかで、ニュースでご覧になった方も多くいらっしやるでしょう。夏休みといえど外遊び、プール遊び、はりきって海水浴、という子どもたちの姿も変わらざるを得ないのかもしれない。外で遊ぶお子

さんたちの姿が逆に心配、というありさまでは長期休み本来の目的が変わってしまいかねませんね。

教育先進国として知られる北欧では、小さな子が自然と触れ合うこと、自然の中で発見することを学びとしてとても大切にしているそうです。小さな頃に感じた驚きや発見の喜びは、その後の成長の核となるといわれていますが、近年日本でも教育のあり方が見直され、従来の「課題解決型」から「問題発見型」へと移行する流れが加速しているとか。自分が疑問に思うこと、理由を「知りたい」と思いそのために行動する。おかしいと思ったことにきちんと声をあげ、伝えるための自分の言葉を持つ。豊かな自然と触れ合うことでこそ培われるものは、スマートフォンやタブレットとは少し距離を置いたところにあるものなのでしょう。

ごく身近な気がかりから、遠い世界の出来事まで。「ウソみたい」と思うことを笑いだけで済ませず、少し高めのアンテナを張る気持ち忘れずにいる。自然という豊かさを享受する身であるなら、それはきつと責任なのかもしれませんね。



### 浄国寺のホームページのご案内

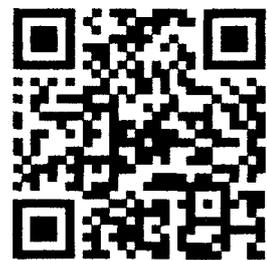
以前のホームページサービスがサービス終了してしまったので、移転しました。ご覧になる場合、次のイ、ロ、ハのいずれかの方法でアクセスしてください。

イ. インターネットブラウザのアドレスバーに、次の URL を入力する。

<http://joukokuji.yukimizake.net/>

(「じょうこくじ・ゆきみざけ・ネット」と覚えてください)

ロ. スマートホンの QR コード読み込みアプリを使い、カメラで右の QR コードを写して読み込ませる。



ハ. 「上越市 もんと浄国寺」などで検索する。

# 「男旅」

山崎隆昌

弥次喜多ではないが、親しい友人と「男旅」と称して時々旅行する。

今回は東京へ出かけた。残念ながら、友は所用のため深夜日帰りの強行日程。

## ◇一日目

午後三時上越妙高発、五時過には東京駅着。そのまま四ツ谷の紀尾井ホールへ直行する。

ヴィンゲルのピアノリサイタルを聴く。曲目はラモー×ドビュッシー×ムソルグスキ（展覧会の絵）と並ぶ特徴のあるプログラムだ。

受付で配られた資料を読むとヴィンゲルは「いわゆる全曲集をカタログ的に演奏するのは興味がない。同じ傾向の曲が続いて退屈になるから」と述べている。解説者によれば、今回のプログラムの意図するものは「音楽の絵画的性にある」と書かれていた。

演奏は派手さは無いが端正な演奏で、一つ一つの音がよく聞こえ、心地のよいものであった。

耳底に残るピアノの音を反芻しながら神保町に移動してホテルにチェックイン、そして直ちに「男旅」の主たる目的の夜の街へ出る。ぶらぶら歩き良さそうな店を探す。通りから

外れたところに「広島お好焼き」の灯りが目に入り暖簾をくぐる。熱々の「お好焼き」を肴にちびりちびり。杯を重ねほろ酔いとなり打ち上げ。友はそのまま深夜バス乗車のためバスターミナルへ。私はホテルのベットへ向かう。就寝。

## ◇二日目

ホテルで遅い朝食を済ませ、「鏑木清方展」を観るため地下鉄で竹橋の東京国立近代美術館へ向かう。

本展では、代表作『築地明石町』とあわせて『新富町』『浜町河岸』の「三部作」が公開されている。「三部作」は長く所在不明で、一般に「三部作」があわせて公開されるのは四十四年ぶりというから、昭和五十年まで遡るのぼる。

明治から昭和にかけて活躍した鏑木清方は、美人画の名手として知られ、会場には「三部作」を中心に、美しい美人画や江戸・明治期庶民の生活を描いた画など数多い作品が展示されていた。

美しい描線と淡く澄んだ色彩が観る者を柔らかに包んでくれる。中には清方が大きな影響をうけた泉鏡花の肖像や、弟子の伊藤深水が描いた鏑木清方の肖像画もあって、気持ちのよい満ち足りた作品展であった。

天候は小春日和、美術館を出て、皇居のお堀に沿ってゆっくり東京駅に向かう。そのま

ま駅内を抜け八重洲ブックセンターへ。

センター内は平日の昼休みにもかかわらず人で溢れていた。本屋はそこに身を置くだけで何かしら刺激を受け好きな場所だ。かねてから探していた本三冊程購入する。

時刻は一時半、ホテルで朝食を十分に摂ったので昼飯は抜きとする。本屋を出て東京から上野へ移動、目指すは久しぶりの鈴木演芸場だ。

時間の関係から途中入場途中退場となる。何しろ昼の部だけで様々次々と演じられ四時間の公演時間。それでも「時蕎麦」など落語三題を聴き、林家楽一の紙きりを観る。話芸の面白さを十分堪能することが出来た。

旅の仕上げはアメ横の居酒屋へ、牛すじ煮込と冷や奴を肴に軽く一杯、至福の時だ。

四時半、夕暮れの上野を後にして上越妙高へ。面白い旅をさせてもらった。親しい友が同行していたならさらに楽しかったろう。いささか残念に思う。

さてさて、次回の「男旅」は何処へ



# ワン公物語 ②

華のつぶやき

山崎 華 (慎子代筆)



私は華。パグ犬の雌。十二才六カ月である。目下、私の最大の関心は何をおいても食べる事。三度の食事(そう人間並に、と言っても僅かな一握りでしかないのだけれども)と、気紛れに貰うおやつが最高の喜び、楽しみ。忘れられては一大事なので食事の要求と排泄の為の外出の時だけは、猛烈にアピールする。あとは日がな一日、殆どお昼寝。眠る、眠る、眠る。まアるくなったり、うんと伸びたり気儘な格好で、ただただ眠る。

そうそう父さん母さんが大好きだったコウシヨウさんは、その晩年お昼寝をすることが多くなっていたらしい。「どうしてそんなに寝てばかりいるの?」と尋ねる妻に、彼は「はい、永眠の稽古と思ひまして」と応じていたんだって。

母さんは殊の外その話が気に入ってしまつたらしく、しばしばそれを話題にした。だから、いかな私でもすっかりそれを覚えてしまった。だから近頃は「華、眠ってばっかりね」という母さんに「はア、永眠の稽古をしてまして」と答えてるんだけど、母さんの耳には果たして届いているものやら。マ・イイか! ある朝のこと。さて寝ましょと体勢を整え

ていると、何やら聞き馴れない大きな音。すざましい音が響いて来る。ナンダナンダ、何も聞いてないよ。と思う間もなく、いつしか眠りにおちる。母さんと違って眠り上手な私。音の正体はこうだった。庭の東側にある大きな二本の櫟、その側にある栗の古木、その他の樹木を伐ることになったのだった。訳は私にはよく分からないけど、隣接する土地が売れて、そこに新しく家が建つようになったらしい。

櫟の枝は隣地に覆いかぶさっており、秋には松や柿の葉が少なからず落ちるのを、土地の持ち主は目をつぶっていてくれたのだ。

櫟はどんぐりの実をつけ、実が落ちるとそこから芽が出て葉を伸ばし、どんどん伸びて行く。うっかりしていると引っこ抜けない程根を張り、うまく抜けた根にはしっかりとどんぐりがくっついていて、あゝこうして命をつないでいるのだと、母さんは感慨も一入だ。栗の木は業者さんも驚く程太く大きな老木で日照不足もあるのか、近年は実もあまり採れなくなってしまうていた。

その上、栗の花は匂いも強く一面に落ち、イガの始末も結構大変そう。イガは、ゴミを回収してくれる人達が痛くないように新聞で三重に包み、その上で袋に入れて回収場所に出すんだって。我が家のゴミ処理はこの十年来、父さんが担当で仕分けから袋詰め

の出しと、一手に引き受けられている。ちなみに今年の栗のイガは、45ℓ袋に三つ程。いつもは七袋程あったんだって。

一昨年は参道の東側の松、昨年は西側の松。何れも樹齢五十年程のものを、松食虫のせいで切り倒し、今年も、櫟、栗、柿、紅葉、その他樹木の伐採続きで、父さんも母さんもやるせない思っているらしい。

風を運び、木陰をつくり、空気を浄化し、葉は土地を肥やし、一本の木の恩恵は計り知れない。でも現代人はともすると、目の前の厄介だけが気になり、邪魔なら捨てろ、困るなら倒せと簡単に答えを出すようだ。

私達ワン公仲間も、子犬のうちにはちやほやされ、差し障りができたり飽きてしまつと放り出されてしまう仲間が驚く程いるそう。

時折私は、老犬の私を放つたらかしにし過ぎじゃないの?と不満をかこつこともあるんだけど、まアまアの境遇かな。何よりも直子姉さんは、優しいきれいな声で「華ちゃん」と呼んで外に行き、庭の雑草を引きながら私を遊ばせてくれるんだ。私は直子姉さんの半径5m位の所をうろろしながら、時々側に寄ってスリスリして。あゝその時間の何と穏やかで素敵なこと!鳥が空から「甘えているぜ!」と叫んだり、蝶々が「幸せなワン公ね」と囁いていくんだ。マ・イイカ (以下 次号)